

連載

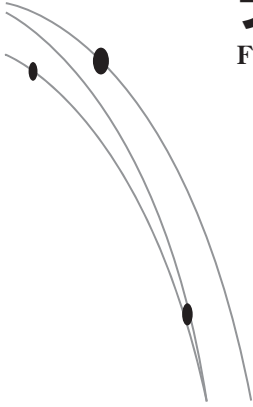
## フィールド・アイ

Field Eye

日本から——①

小野 浩

Hiroshi Ono



〳〵「小さな政府」と「選択の自由」を誇る国から見た日本

この欄では、本来海外の労働に関するトピックを日本の研究者の視点から紹介している。今回はその主旨とは逆に、海外在住で研究している私のようなものが、日本で生活したときの感想を紹介することになる。

2012年の8月下旬から年末にかけて、約4カ月間大学から研究休暇をいただき、東京に滞在した。わが家には小さい子供が二人いるため、今回は家族連れの滞在となった。期間中には東京大学社会科学研究所と政策研究大学院大学に客員として受け入れていただき、大変お世話になった。久しぶりに学術的な内容から離れて、厳しい審査を受けることもなく、滞在期間中に感じたことを率直にこの誌面で書かせていただきたいと思う。

住まいは東京大学の白金台ロッジという、願ってもいない抜群な立地に恵まれた。研究者を対象としたこのロッジの家賃は大幅に優遇されている。その反面ロッジの入居は倍率が高く、抽選であった。くじ運は決して良くない方なのだが、この度は見事に当選した。言うまでもなく東京都内の家賃は高価である。しかも短期滞在中で家具つきの家族向け物件となるとなおさら高い。ロッジの抽選に当たった瞬間がまさに東京行きの切符を獲得したことになった。当時の為替は1ドル76円台という超高台時期であり、米ドルで給料を受け取っている身分、割高感は一層に堪えた。それでも貴重な経験である以上割り切って東京に行く決断をした。

東京に着いた数日後にはまず港区の区役所に行って

住民登録を済ませた。国民健康保険加入、国民年金加入、子供の入学届け、スポーツ施設の利用申請など、諸手続きは多かった。しかしこのようにきちんと最初から区に登録することによって、日本のセーフティネットに正式に受け入れてもらえたような気がした。社会保障制度が弱いアメリカでは経験できない安心感を覚えた。

子供たちは、それぞれ小学3年生と幼稚園に通うことになった。日本の義務教育には個人的にも関心が高かったため、滞在中の子供の教育にはできるだけ深く関わることにした。出だしの数週間は、文房具、体育具、防災具など用意するものが多岐にわたり、かつ学校指定のものが多かったため、準備に手間取った。

子供たちも学校生活に慣れ始めたころには、日本の学校の普遍的な古き良き習慣について改めて感慨を覚えた。小学生の娘は体験学習で稲刈りに参加した。幼稚園の娘も遠足で芋ほりに参加した。実際に土から掘り出したさつまいもを持ち帰ってきた娘は満面笑顔であった。12月には餅つきを体験し、みんなでおいしいお餅を楽しんだ。

小学3年生の娘は毎日のようにまわってくる当番制度についてやる気満々であった。生徒が自ら教室を雑巾で掃除したり、かっぱう着を着て給食と後片付けをする行為は、子供たちに責任感と謙遜を身につけさせる。アメリカの学校の掃除は清掃員に任せきりである。自分が汚しても他人が世話してくれるという安易な気持ちが子供のときから浸透してしまうのは残念である。

娘は学校の体育・保健の授業を通して、正しい健康管理、食生活についてしっかり習得した。ある週には、保健の授業で、日常生活の時間の使い方を日記式に記入する宿題があった。睡眠、食事、運動という項目とは別に、排便という記入欄があったのにはさすがに親子で赤面した。

小学校の給食制度は高く評価したい。毎日の献立は学校の栄養士が栄養配分を配慮した上で月初に発表される。献立表には食材の産地からカロリー量まで細かく記載されている。献立はバラエティに富んでおり、季節にあった食事が用意されている。給食は「完食」が原則である。娘は小魚、煮物、漬物、おひたしなど、必ずしも好物とはいえないものが出て残さずに食べる習慣がしっかり身についた。デザートは基本的にはないが、たまにみかん、りんごなど果物が出てく

る。デザートが大好きなうちの娘は、献立表を見ては果物が出る日に大きく赤い丸で囲んで、楽しみにしていた。

これに比べ、アメリカでは子供の食に関して「選択の自由」が重んじられる。個人の意思が尊重され、選択は学校に干渉されないといえれば聞こえがいいかもしれない。しかし現実問題として子供に選択の自由を与えると、よほど意志が強くない限り偏食になる。子供の頃から毎日フライドポテトを食べるのも自由だ。一方で学校が責任を持って児童に正しい食習慣を覚えさせるとなると、これは逆に個人の選択を束縛し、「人権侵害」とまで言われるようになる。

アメリカに戻ってきた子供たちの第一印象は、とにかく肥満児が多いことだった。OECD加盟国の中では肥満率が最下位の日本から、最上位のアメリカに戻ってきたわけだから、その差はいやでも目に余る。アメリカでは、わが家も選択の自由を行使してお昼ご飯は学校の給食ではなく、毎日家からお弁当を持参するようにしている。

滞在中は日本の医療制度にもお世話になった。アメリカでは信じたいが、子供の医療費は無料であった。成人の医療費もアメリカの数分の一に過ぎない。また、区健康診断なども受けることができた。

11月には身体を壊して入院する始末になった。病気をすることは決して愉快ではないが、これもまた貴重な体験だった。日本の医療制度も欠点があることは承知している。しかしアメリカの制度に比べると比較にならないほどすばらしいものだということが身にしみてわかった。私の場合3日間入院することになった。退院時には速やかに請求書が発行され、清算することができた。3日間の費用は僅か3万円であった。

これを数年前アメリカで似たような経験をしたときに比較してみよう。当時はかなり体調を悪くして入院したわけだが、最初から費用のことが気になって落ち着かなかった。病院で横になっている間常に料金が加算されるようなひどい不安に悩まされ、とにかく1分でも早く退院することしか考えられない。3日間経過した時点で何とか退院することができたが、その後半年間は、病院、医師、技師などから積もるように請求書が送られてきた。最終的に精算された額は約80万円を上回った。言うまでもなく保険に加入しているので、保険を適用した後に支払った額である。なぜこれ

だけ膨大な医療費になるのかはこの誌面で書くスペースはないが、セーフティネットが欠落したアメリカ社会の盲点であることは間違いない。アメリカで個人破産する最大の原因は医療費の債務不履行である。先進国にとってはまことに情けない現実である。

最後に、食事について触れたい。日本に来て何がいちばんの楽しみかといえば食事につきる。歳をとるにしたがって食事に対するこだわりは強くなっていくので困ったものである。

日本はとにかく食がおいしい文化である。アメリカの食はまずまずだが、その前に8年間いたスウェーデンは(失礼だが)食が発達していない文化であった。食事の品種が少なくてすぐ飽きてしまう。レストランの評価でよく知られているミシュランの星を国別に見ると、日本が断トツ1位、フランスが2位になる。都市別に見ると、東京が1位、パリが2位になる。テキサスの田舎から東京に出てきたわが家にとって、毎日、いや毎回の食事は大きな楽しみだった。平日は子供の学校の関係でほとんど家で食事をしたが、週末は外出することが多かった。4カ月の滞在とは長いようで短く、週末の数を数えて、そのうち何回外出できるかを計算すると回数はかなり限られてくる。この「制約」の中でどうやって家族4人の食の効用を最大化するか真剣に取り組んだ。しかもどこで食事をして、ここにはまた戻ってきたいというお店ばかりなので、わが家の効用関数をさらに複雑にした。

小さい子供が2人いる分高級料理に行く機会は少なかったが、とんかつ、ラーメン、焼肉などいわゆるフツーなお店に行っても十分食事が楽しめることがありがたかった。洋食でも日本で食べる洋食の方がおいしいような気がした。やはり日本人の味覚にあった洋食というものがあるのだろう。また、コンビニに立ち寄って気軽におにぎりとお茶が買えるのもほっとする。なぜこんな些細なことで心が安らぐかということを外国人に説明してもまず理解してもらえないだろう。

おの・ひろし テキサス A&M 大学大学院社会学研究科准教授。最近の主な著作に“Lifetime Employment in Japan: Concepts and Measurements.” *Journal of the Japanese and International Economies* 24 (1): 1-27. 労働社会学, 労働経済学専攻。